

プロローグ

沢田真の眼前には、東京湾からの強風を受けて隅田川がうねりを上げている。対岸には、聖路加タワーがそびえ、高層ビル脇の遊歩道には数組のカップルがゆっくりと歩いているのが見える。向かい風にも負けず、互いに腕を組み歩道を歩いていく彼らの様子は、遠目にも楽しげだ。

「俺にもあんなときがあつたんだな……」

ひとりごちた沢田は、五分前によく打ち終えた携帯メールを凝視した。そして意を決したようにうなずくと、送信ボタンを押した。

「俺は何をしているんだ？ これでいいのか」

二〇〇X年九月下旬 午後七時三〇分

中央区月島

ぶつぶつと独り言を繰り返す中年男の横を、数人の女子中学生が気味悪そうに通りすぎて行く。

「ねえ、あのオヤジ、なんか、キモくない？ 見てみなよ、なんか左手の薬指に嵌めて、変な動きしてるよ。何アレ？ ギター弾く真似なのかな……。でも、絶対逝っちゃってるよ」

小さな薬瓶が街灯の光を反射させている。沢田の左手薬指は、ゆつくりと左わき腹の近くで、横方向の動作を繰り返す。

「本当に川に來ちゃったよー。これじゃ、スプリングステイーンの歌詞のまんまじゃないか」――。

沢田は、ブルース・スプリングステイーンの「ザ・リバー」を思い出し、イントロに流れるハーモニカを模して口笛を鳴らし始めた。左手薬指の動きは、依然として止まらない。マイナーコードで綴られたオリジナル曲は、挫折した名も知れぬ男女の青春を物憂げに描いた名曲だ。が、落ちぶれたサラリーマンが調子はずれな口笛でなぞると、出来損ないの祭囃子のようにしか聞こえない。下手な口笛とともに、沢田はゆつくりと歩を進める。隅田川を通り抜ける川風と、ビルの屋上から吹き込む突風にあおられながら、沢田は川沿いにそびえ立つ地上五階建ての巨大マンションを見上げた。三三階には、飯豊友行の住む広いルーファルコニー付きの瀟洒な一室がある。

「飯豊、お前はいつでも要領がよかったよな。そして俺はいつも貧乏くじだ。最後のさいごまで、この役回りは変わらなかつたな」

「飯豊。俺はお前のフォローはしたが、お前を貶めることはしなかつたはずだ。でもお前は……」

沢田の独り言はやまない。老舗デパートの買物袋を提げた老婦人がいぶかしげに、そして人相を確かめるように沢田を覗き込んでいく。

「真面目にリポート書いて悪いかよ。ほんとのこと書かれて、困るようなことするなよ。要領よく世間を渡ってきたお前なら、あの程度のネタは無視すりゃよかったんだ」

巨大マンションの入口に仁王立ちしていた初老のガードマンが、先ほどの老婦人から耳打ちでも受けたのだろう。約一五メートル先の入口から、沢田を凝視し続けている。

「そろそろかな。別にびびってるわけじゃないよ」――。

沢田は使い古したコーチのブリーフケースに右手を差し入れ、中身をまさぐった。人差し指にこつんと硬い木の感触。親指と中指、人差し指で一気に硬い棒を取り上げようとしたが、iPodのヘッドフォンが絡みついて取り出せない。

「最後までついてねえな、ったく」

沢田はブリーフケースを足元に下ろし、取っ手に絡みついたヘッドフォンのコードを外し、文化包丁を取り出した。

「多少錆びてはいるが、十分でしょ」

両手で文化包丁を握ると、沢田は自らの頸動脈に一気に振り下ろした。

ブシュー。鈍い音のあと、沢田はどろりと流れ出した血を感じたが、もう既に言葉を発する力は残っていないかった。

グシャー。前のめりに倒れ込んだ沢田の頭部近くで、左手薬指に嵌めていた小さな薬瓶が割れた。が、首からほとぼしる大量の血に気をとられ、初老のガードマンは小瓶が割れたことに気づかない。

「お、おい、大丈夫か」

あわてて駆け寄ってきたガードマンの声が、次第に遠のいていく。ガードマンの歪んだ顔も徐々に見えなくなってきた。視界も容赦なく遮られていく。

刃物で死んだロック・スターって誰だっけ？ ニルヴァーナのカート・コバーンは猟銃で死んだのか？ ジミ・ヘンドリックスの死因は？ 刃物は誰だっけ？ でも文化包丁じやカッコつかないな……。

The background is a white, textured surface, possibly paper or fabric, with numerous irregular holes and tears. Through these openings, various black and white photographs are visible, showing scenes of buildings, streets, and people. The overall effect is that of a collage or a collection of memories revealed through a fragmented medium.

第1章
胎動

SHINE ON YOU CRAZY DIAMOND (PART1)

Words by David Jon Gilmour, Roger Waters, Richard John Peter Wright

Music by David Jon Gilmour, Roger Waters, Richard John Peter Wright

©1975 by ROGER WATERS MUSIC OVERSEAS LTD.

All rights reserved. Used by permission.

Print rights for Japan administered by YAMAHA MUSIC FOUNDATION

JASRAC 出 0512403-501

「思い起こせ、まだ若かったあの頃を…」

おまえは太陽のように輝いていた

輝け！ 狂ったダイヤモンド

空にあいたブラック・ホールのように

すっかり虚ろになってしまったおまえの瞳

輝け！ 狂ったダイヤモンド」

(「狂ったダイヤモンド・第1部」ピンクフロイド)

「はあ？ 何ですって。少々お待ちください」

日本銀行新館七階。日本の通貨である円の価値を守り、国の血液でもある通貨の信用秩序を守る砦。金融政策の中樞を司るフロアの一角に、政策委員会室政策広報グループがある。マスク対応と日銀内部の広報を兼ねる重要セクションの朝は、若い女子行員の突拍子もない声で突如かき乱された。

「どうした？ 替わろうか」

政策広報担当企画役、内田泰久はそう言って女子行員の電話を引き継いだ。大方、超低金利政策の長期化に腹を立てた年寄りからの電話が回ってきたに違いない。代表電話の交

「オペ当日」二〇〇X年一月二〇日月曜日 午前八時三〇分

日銀政策委員会室

換台には、一般人からの電話を回すなどあれほど強く言っているのに、困ったものだ。ただでさえ予定が目白押しなのに、朝からクレーム処理ではたまらない。しかし、そんな内田の考えは一瞬のうちに吹き飛んだ。

「埼玉県警です。先ほど、県警本部に御行の戸田発券事務処理センターで原因不明の爆発が起こったとの連絡が入りました。けが人は出ていないようですが、詳細は不明です。現場にどなたか担当の方を急行させてください」――。面識のない埼玉県警の担当者の声は心なしか上ずって聞こえた。いたずら電話でないことは、その声の調子からもうかがえた。「はい、分かりました」

内田はそう返すのが精一杯だった。すぐに電話を切った。まさか、勘弁してくれよ。年寄りのクレーム電話などではなかった。一週間前に受け流したはずのメールの通り、何か不穏な事態が起こりだしたのだ。



一月一三日。内田と同じ課の女子行員のもとに差出人不明のメールが舞い込んだ。『予告』との件名が記されたそのメールは、こう告げていた。

〈11月20日 エリートトの皆さん、注意しましょう。復讐劇が始まります。 反逆者より〉

メールの発信元は、大手インターネットプロバイダが提供している無料メールサービスだ。念のため、システム担当者に発信人の追跡を試みてもらったが、徒労に終わった。海外のプロバイダのサーバを二重、三重に経由して届いたメールの発信源は、日銀の一システムエンジニアの手に負える代物ではなかった。犯罪の匂い、あるいは実際に実害がなければ、日銀といえどもプロバイダに発信人の履歴情報を照会するのは無理だ。

超低金利政策の長期化とともに、利息収入がガタ減りした老人たちからのクレームにはもはや慣れっこになっていた。また、日銀の様々な金融政策に論戦を挑もうとする輩たちからのアクセスもしばしばある。日銀の理屈で論破されると、こうした連中が嫌がらせ的な行動に出たり、感情的なメールを投げてくるのも日常茶飯事だ。しかし、大方のクレームは、個人の苦情処理に当たる情報サービス局に回るか、あるいはホームページ上からアクセスするメールサーバに入り、一般用とは完全に遮断された別系統サーバの政策広報まで達することはない。内田は念のため上司の審議役にメールのコピーを見せたが、「合コンか何かで彼女に振られた男の腹いせじゃないのか」と一笑に付されて終わりだった。「そうだよな、日銀をどうこうしても何も得られるもんじゃないし、まして、デフレが完全に終息するわけでもない」――。

内田もこうやって一週間前に自らを納得させたばかりだったのだ。